

平成 24 年度マダラ日本海系群の資源評価

責任担当水研：日本海区水産研究所（後藤常夫、藤原邦浩）

参 画 機 関：青森県産業技術センター水産総合研究所、秋田県水産振興センター、山形県水産試験場、新潟県水産海洋研究所、富山県農林水産総合技術センター水産研究所、石川県水産総合センター

要 約

マダラ日本海系群の漁獲量（青森県～石川県）は、2001 年以降 1,300 トン前後で低位で安定していたが、2004 年に増加し、2007 年には 3,669 トンとなった。翌 2008 年は 2,737 トンに減少したものの、その後 3 年続けて増加し、2011 年には 2000 年代に入って最高の 3,735 トンに達した。ただし 2012 年には、1～3 月の漁獲量が前年同期の 58%と大きく減少した。本系群の資源水準は、2011 年時点での漁獲量から見て高位と判断される。近年における漁獲量の動向は 2004 年に急増後、増減はあるものの高いレベルで変動していることから、資源の動向は横ばいとした。ただし、2012 年 1～3 月の漁況は荒天等の影響を加味してもあまり良いとは言えず、今後資源の動向を注視する必要がある。

ABClimit は、直近 3 年間の漁獲量の動向と資源水準から算出した。ABCtarget は、不確実性を見込んでやや少なめの漁獲量とした。

	2013 年 ABC (百トン)	資源管理基準	F 値	漁獲割合
ABClimit	37	1.0・Cave 3-yr・1.04	—	—
ABCtarget	29	0.8・1.0・Cave 3-yr・1.04	—	—

年	資源量 (トン)	漁獲量 (百トン)	F 値	漁獲割合
2010	—	36	—	—
2011	—	37	—	—

水準：高位 動向：横ばい

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
年別（月別）漁獲量	漁業・養殖業生産統計年報（農林水産省） 生物情報収集調査（青森～石川(6)県）
漁業種類別漁獲量	各県農林水産統計年報（農林水産省）
資源量指数等 ・沖合底びき網	漁場別漁獲状況調査 沖合底びき網漁業漁獲成績報告書（水産庁）
漁獲物体長組成	生物情報収集調査（青森県・山形県・石川県）
幼魚の発生状況	新規加入量調査（新潟県）

1. まえがき

我が国のマダラの漁獲量は、過去 5 年間でみると 4 万トン前後～5 万トン台で推移している。そのうち能登半島以北に分布する日本海系群の漁獲（日本海北区：青森県～石川県）が占める割合は 6～8%である。マダラ日本海系群は、冬季の重要魚種であり、沖合底びき網、小型底びき網、刺し網、定置網、釣り、延縄などにより漁獲される。12～3 月の産卵回遊期が主な漁期となるため、体長 50～70cm 台の魚が漁獲の主対象となり、これらは 4～6 歳魚と推察される（柴田 1994）。したがって、若齢から漁獲される北海道系群（千村・船本 2012）や太平洋北部系群（成松ら 2012）より高齢で漁獲される点が本系群の特徴の一つとしてあげられる。

2. 生態

(1) 分布・回遊

本州の日本海側におけるマダラの成魚は、青森県から山陰地方（鳥取県および島根県）にいたる水深 200～400m 前後に広く分布する（図 1：三島 1989、水産庁 1989）。産卵期にいくぶん浅い海域に移動するとされるが（三島 1989、水産庁 1989）、回遊・集団構造に関する知見は少ない（菅野ら 2001）。広域移動を行う個体がいる一方、比較的限られた海域でローカルな地域個体群を形成するものもいると考えられている。

(2) 年齢・成長

1 歳で被鱗体長（以下、体長と略記）18cm、2 歳で 32cm、3 歳で 44cm、5 歳で 63cm、8 歳で 81cm に達する（柴田 1994：図 2）。寿命は 10 歳と推定されている（水産庁 1989）。

なお、本評価報告書でいう年齢はふ化からその年の末までを 0 歳、以降暦年によって 1 歳、2 歳のように表記する。ただし、主な漁期に当たる 12 月から翌年 3 月までの漁獲物の年齢をまとめて考える場合は、翌年の年齢を表記した。また、「年級」はふ化時の年（西暦）を指すこととし、例えば 2006 年級群は 2006 年の春先にふ化した群れを示す。

(3) 成熟・産卵

雌は体長 50cm 以上で成熟すると考えられ（中田ら 1995）、成熟年齢は 4 歳と推察される。産卵期は 1～3 月であり、産卵場は局所的に分布する。なお、その底質は、卵が採集された場所から判断して、泥底、砂泥底、礫砂底、礫底と考えられる（與世田ら 1992）。また、飼育実験から、産卵は一回の放卵で完了することが報告されている（桜井・吉田 1990）。

(4) 被捕食関係

未成魚、成魚ともに魚類、頭足類、甲殻類（エビ類）を主な餌としている（水産庁 1989、柴田 1994、中田ら 1995）。なお、本種の捕食者は明らかではない。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

沖合底びき網、小型底びき網、刺し網が主要な漁業種である。マダラ日本海系群の漁業種類別漁獲量について、過去 16 年間（1996～2011 年）では、沖合底びき網による漁獲量

が全体の 15～42%、小型底びき網が 18～39%、刺し網が 24～42%を占めていた（図 3：ただし 2011 年は暫定値）。残りは、定置網、釣り、延縄などによるものであった。特にここ 2 年間は、底びき網の割合が減少する一方で刺し網と定置網の割合が増加した。なお、各県における漁業種類別漁獲量の経年変化（1996～2011 年：ただし 2011 年は暫定値）を付図 1 にまとめた。

（2）漁獲量の推移

日本海系群の漁獲量（青森県～石川県）は、1964 年以降 1980 年代末までおよそ 2 千トンを中心に周期的な変動を示してきた（図 4、表 1）。1989 年の 5,174 トンをピークとする急増は、1984 年の卓越年級群の発生によると捉えられている（梨田・金丸 1991）。その後漁獲量は、1964 年以降最低の 1,038 トン（1993 年）にまで急落した。それ以後 1997 年まで増加したのち、再び減少傾向にあったが、2004 年から増加に転じ、2007 年は 3,669 トンとなった。翌 2008 年は 2,737 トンに減少したが、2009 年には再び 3 千トン台となり 2011 年は、2000 年代に入って最高の 3,735 トン（暫定値）に達した。なお 1997 年の漁獲量のピークは、1992 年の卓越年級群の発生（河村 1995）によると考えられ、近年の急増も 2001 年と 2006 年に発生した卓越年級群に由来すると考えられる（後述）。以前は石川県の漁獲量が当海域の半分以上を占めたが、1990 年代に著しく減少し、その分を補うように、青森・秋田両県の割合が高くなった。しかし、2010 年に石川県の漁獲量が 20 年ぶりに 1 千トンを超え、翌 2011 年も同様に、日本海系群全体の約 30%を占めた。

なお、日本海全体の漁獲量については、青森県～石川県の日本海北区（日本海系群に相当）と福井県～鳥取県の日本海西区でみると、1970 年代から 1990 年までは日本海西区で数百トンレベルの水揚げがあった（付図 2、表 1）。しかし 1990 年代の日本海西区は数十トンレベルで推移し、全体の 97%以上が日本海北区で漁獲されていた。2000 年代に入ると、日本海西区の漁獲量が漸増傾向を示し、2008 年以降は全体の 10～15%前後を占めている。

2001～2012 年までの 1 月から 3 月の漁獲量を図 5 に示す（2004 年以降は速報値）。年間漁獲量の 7 割前後を占める 1～3 月の漁獲量は、2005 年に急増後 1,500～2,000 トン前後で推移してきた。しかし、2012 年は、この間で最も低かった 2008 年（1,462 トン）をさらに下回る 1,313 トンで前年同期の 58%であった。特に 1 月の漁獲量は、2001 年以降では最低値を示した。このような漁獲量の減少は、時化等荒天による出漁抑制の影響に加えて、出漁してもまとまった量が獲れなかったことも要因の一つと考えられた（各県試験研究機関からの情報より）。

1979 年以降の沖合底びき網（1 そうびき）による漁獲動向を図 6 並びに表 2 に示す（2011 年は暫定値）。漁獲量は 2001 年から 2004 年まで 2 百トン台で安定していたが、2005 年に急増し、以後増減を繰り返しつつ、2011 年は 2008 年並みの 464 トンであった。海区域でみると（付図 3）、漁獲量は 2005 年以降、男鹿（北部と南部）が全体の 90%以上を占め、この海域で極めて多いことがわかる。

（3）漁獲努力量

1979 年以降の沖合底びき網（1 そうびき）の有効漁獲努力量は、近年では 2007 年をピークに減少傾向にあったが、2011 年はやや増加した（図 6、表 2：2011 年は暫定値）。海区域

でみると（付図 3）、2011 年に男鹿北部と新潟沖でやや増加したが、その他の海区では前年と大きく異なることはなかった。

4. 資源の状態

（1）資源評価の方法

本資源の評価は、漁獲量を基本とし、これに沖合底びき網漁獲成績報告書から得られる統計資料（詳細については、補足資料 1 を参照）を用いた。なお、沖合底びき網漁獲成績報告書を用いて算出される資源量指標値として 2 種類（資源量指数・資源密度指数）が示されている（補足資料 1）。本系群の場合、後述のように 1980 年代末から 1990 年代にかけて漁場がより北部を中心に形成されるとともに、漁獲量も減少した。そこで経年的な資源量の変化をみる指標としては、漁場の広がり（有漁漁区数の増減）も加味した資源量指数が適当であると判断し、この指数を用いた。また、幼魚の発生状況を把握するための新規加入量調査の結果を示した。さらに、漁獲の主体となる年級群を推定するために、生物情報収集調査による漁獲物の体長組成を用いた。

（2）資源量指標値の推移

1979 年以降の沖合底びき網（1 そうびき）による漁獲動向を図 6 並びに表 2 に示す（2011 年は暫定値）。資源量指数は 2003 年を底に増加し、2010 年は 1979 年以降では 1989 年と 2009 年に次ぐ高い値を示したが、2011 年は急減し 2006～2007 年並みとなった。海区別でみると（付図 3）、男鹿北部が 2009 年をピークに減少傾向にある一方で、2011 年においては、南部では前年並みであり、両海区とも 3000 弱であった。そして、各海区とも 1990 年代は努力量が比較的安定していたにもかかわらず（ただし、新潟沖と能登沖では 1990 年代後半にやや減少傾向）、漁獲量と資源量指数は、能登沖と加賀沖では低い状態が続き、新潟以北では顕著な増減が認められた。また、石川県の漁獲量が 1990 年代初めに急減し、以後 2000 年代初めまで低いレベルで推移していた（図 4）。これらのことから判断して、1990 年代から 2000 年代初めにかけて、漁場（産卵場）がより北の海域を中心に形成されていたと考えられる。

春季に新潟県直江津沖で小型底びき網により実施した新規加入量調査における 1 歳魚（体長 10～32cm 未満と仮定）の採集個体数の経年変化を図 7 に示した。2007 年、2011～2012 年で上位 2 曳網の採集個体数が多く、それぞれ対応する 2006 年級群、2010～2011 年級群の豊度が他の年級群と比べて高いと判断された。

（3）漁獲物の体長組成

2012 年に青森県（刺し網）、石川県（刺し網）及び山形県（底びき網）において、主漁期にあたる 1 月から 2 月にかけて水揚げされたマダラの体長組成を図 8～10 に示す。青森県では、60cm 台の 5 歳魚が主体であった 2011 年と比べて、2012 年には 60cm 台後半から 70cm 台の 6 歳魚が多くを占めていた（図 8）。一方、石川県では、水揚げ漁港でピークを示すモードは異なるものの、60cm 台後半を中心とする 6 歳魚と 50cm 台の 4 歳魚が主体をなしていた（図 9、図 12 の底びき網の結果も参照）。山形県では、2010 年に 4 歳に相当する 50cm 台後半の魚が中心をなし、その 1 年後の 2011 年には 5 歳に相当する 60cm 台の魚

が中心となった。2012 年は、雌では 60cm 台後半を中心にそれよりやや小さい 5～6 歳魚が中心であったものの、雄では 60cm 台前後の 4～5 歳魚が漁獲されていた（図 10）。

以上のように、2012 年には 2006 年級に相当する 6 歳魚が 3 県でみられた。同時に、石川県では 2008 年級に相当する 4 歳魚が、山形県では 2007～2008 年級に相当する 5～4 歳魚がみられた。

（4）資源の水準・動向

資源水準の設定は、日本海系群の漁獲量を基本とした。なお、沖合底びき網の資源量指数は、近年新潟以北、特に男鹿を中心とした海域の指数が反映されていると判断されるため（付図 3）、参考値に留めた。水準を決めるに当たり、昨年の評価報告書同様、漁獲量で最低値が得られた 1993 年の約 1,000 トンと近年で最も高かった 2007/2011 年の約 3,700 トンの間を 3 等分した。高位と中位の境界を 2,800 トンに、中位と低位の境界を 1,900 トンに設定した（図 4）。

2011 年時点での漁獲量は高位と中位の境界である 2,800 トンを超えているので、資源水準は高位と判断した。近年における漁獲量の動向並びに沖合底びき網の資源量指数も 2004 年あるいは 2005 年に急増後、増減はあるものの高いレベルで変動していることから、資源の動向は横ばいとした。ただし、2012 年 1～3 月の漁況は荒天等の影響を加味してもあまり良いとは言えず、今後資源の動向に対し注視していく必要がある。

5. 資源管理の方策

1964 年以降の漁獲量の推移から判断して、当海域の資源量は周期的に変動していると思われる（図 4）。少なくとも 1980 年代後半以降にみられた漁獲量の著しい増減は、1984 年と 1992 年、さらに近年では 2001 年と 2006 年に発生した卓越年級群に依拠していたものと考えられる。卓越年級群の発生の有無が、資源量の変動、ひいては漁獲量の大きな変動に深く関わると判断される。したがって、卓越年級群が発生したと判断された場合、資源を有効に利用していくことが重要である。

2011 年時点での資源水準は高位で、その動向は横ばいと判断される。しかし、資源水準が高位にあるものの漁獲量は大きく減少することがある（近年では 2008 年）。努力量が現状を上回らないよう注意し、資源水準の大きな低下を防ぐことを当系群に対する管理方策とする。

6. 2013 年 ABC の算定

（1）資源評価のまとめ

全体の漁獲量を基本として、さらに沖合底びき網の漁獲動向を考慮すると、資源水準は高位、動向は横ばいと判断される。資源水準を大きく下げないためには、努力量を増加させないことが重要である。なお、2012 年 1～3 月の漁況は荒天等の影響を加味してもあまり良いとは言えず、今後資源の動向を注視する必要がある。

（2）ABC の算定

漁獲量が使用できることから、以下に示す ABC 算定規則 2-2)によって ABC を算定する。

$$ABClimit = \delta_2 \times Ct \times \gamma_2$$

$$ABCtarget = ABClimit \times \alpha$$

$$\gamma_2 = (1 + k(b/I))$$

ABClimit を算出するに当たり、Ct は直近 3 年間の平均漁獲量（Cave 3-yr：2009～2011 年、3,521 トン）とした。漁獲量の変動を基に算定する γ_2 について、k には標準値である 0.5 を、b には直近 3 年間の漁獲量の傾き(266)を、I には最近 3 年間の平均漁獲量（同上）を用いた(γ_2 ：1.04)。資源水準によって変化させる係数 δ_2 は、高位での標準値 1.0 とした。ABC target は、安全率 α を標準値 0.8 とおき、2012 年 1～3 月の不漁といった不確実性を見込み、やや少なめの漁獲量として算出した。

$$ABClimit = 1.0 \times \text{Cave 3-yr} \times 1.04 = 3,662$$

$$ABCtarget = ABClimit \times 0.8 = 2,930$$

百トン未満を四捨五入して、それぞれ 37 百トン、29 百トンとする。

	2013年ABC（百トン）	資源管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	37	$1.0 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.04$	—	—
ABCtarget	29	$0.8 \cdot 1.0 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.04$	—	—

(3) ABC の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2010年漁獲量確定値	2010年漁獲量の確定

評価対象年 (当初・再評価)	管理 基準	資源量 (百トン)	ABClimit (百トン)	ABCtarget (百トン)	漁獲量 (百トン)
2011年（当初）	$1.1 \cdot \text{Cave 3-yr}$	-	35	28	
2011年（2011年再評価）	$1.1 \cdot \text{Cave 3-yr}$	-	35	28	
2011年（2012年再評価）	$1.0 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 0.96$	-	31	25	37
2012年（当初）	$1.1 \cdot \text{Cave 3-yr}$	-	35	28	
2012年（2012年再評価）	$1.0 \cdot \text{Cave 3-yr} \cdot 1.07$	-	34	27	

上記表中で、2011 年（2012 年再評価）および 2012 年（2012 年再評価）は、平成 24 年度 ABC 算定のための基本規則に基づき計算した。平成 23 年度同規則を用いた場合の ABClimit と ABCtarget は、2011 年($\delta_1=1.1$)が 35（百トン）・28（百トン）、2012 年($\delta_1=1.0$)が 32（百トン）・26（百トン）である。なお、2012 年（2012 年再評価）の δ_1 は、2012 年 1～3 月の漁況を勘案してやや低めとした。

7. ABC 以外の管理方策の提言

卓越年級群の出現によって顕著な量的変化を示す本資源に対しては、卓越年級群の発生の有無をより早期に把握することで、その後有効に利用することが可能であろう。以下に記したように、卓越年級発生時には若齢魚が通常よりも多く漁獲される。このことは卓越年級群の発生状況を把握する上で有益な情報となる。ただし、若齢魚への漁獲圧が高じる

と資源量は容易に増加しないので注意を要する（成松ら 2012）。山形県では、マダラの幼魚（1～3 歳魚が主体：銘柄 アマコ）が底びき網や延縄などにより混獲されてきた。マダラ幼魚の漁獲量の経年変化を図 11 に示す（石向(2004)に山形水試によるデータを追加）。幼魚の漁獲量は、2001 年以降着実に増加し、2004 年には前年の 3.2 倍に達した。2001 年級群の発生量が多かったと報告されていることから（石向(2002) ほか 各県試験研究機関からの情報より）、2004 年の漁獲急増の主体をなす 2001 年級は卓越年級群であると判断される。なお、2004 年以降、産卵期以外にマダラの成魚や幼魚を狙った漁業も行われている点（アマコ銘柄で水揚げ）に注意する必要がある（山形県水産試験場 私信）。また 2006 年級群については、春季に能登島周辺海域で行われた底びき網調査や定置網乗船調査でマダラ稚魚が大量に採集され（手塚ら 2007）、2001 年級以来の卓越年級群と判断される。さらに、2006 年以降の年級群の資源水準把握に努めていくために、新規加入量調査（図 7、10、11、12）とともに、幼稚魚を含む若齢魚の混獲状況等の情報収集が重要である。2010 年から 2012 年にかけての冬季における底びき網の漁獲物を図 12 に示した。2012 年 1～2 月には、前年体長 10cm 台後半の 1 歳魚に相当していた 2010 年級群が体長 30cm 台となり順調に生育していることがわかった。新規加入量調査の結果並びに秋田沖の底びき網調査結果（大竹・甲本 2012）と併せると、2010 年級は卓越年級群であるかもしれない。このように資源の水準と動向把握の際の重要な情報となりうる若齢魚の出現状況について、各地先でのモニタリングが肝要である。

8. 引用文献

- 千村昌之・船本鉄一郎 (2012)平成 23 年度マダラ北海道の資源評価. 平成 23 年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第 2 分冊, 水産庁・水産総合研究センター, 865-882.
- 石向修一(2002)今期のマダラ漁獲の見通しについて. すいさん山形, 第 242 号, 9.
- 石向修一(2004)今期のマダラ漁の見通しについて. すいさん山形, 第 254 号, 8.
- 菅野泰次・上田祐司・松石 隆(2001)東北地方および北海道太平洋側海域におけるマダラの系群構造. Nippon Suisan Gakkaishi, 67, 67-77.
- 河村智志(1995)地域重要新技術開発促進事業—マダラの生態と資源に関する研究—. 平成 5 年度 新潟県水産試験場年報, 60-66.
- 三島清吉(1989)日本周辺におけるマダラ(*Gadus macrocephalus* TILESIIUS)の資源とその生物学的特性. 北太平洋漁業国際委員会, 研究報告, 42, 172-179.
- 中田凱久・早川 豊・佐藤恭成(1995)まだらの生態と資源に関する研究（まだら資源高度利用管理技術開発研究）. 平成 5 年度 青森県水産試験場事業報告, 170-174.
- 成松庸二・伊藤正木・服部 努・稲川 亮(2012)平成 23 年度マダラ太平洋北部系群の資源評価. 平成 23 年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第 2 分冊, 水産庁・水産総合研究センター, 883-900.
- 梨田一也・金丸信一(1991)日本海中部海域における底魚類の初期生態と海洋環境. 水産海洋研究, 55, 218-224.
- 日本海区水産研究所(2011)日本海区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計調査資料 2010 年（平成 22 年）. 日本海区水産研究所, 1-89.
- 大竹 敦・甲本亮太(2012)底魚資源管理手法の確立に関する研究（マダラ）. 平成 22 年度 秋

田県水産振興センター事業報告書, 33-46.

桜井泰憲・福田慎作(1984)陸奥湾に來遊するマダラの年齢と成長. 青森県水産増殖センター研報, 3, 9-14.

桜井泰憲・吉田英雄(1990)我が国におけるマダラ資源とその生態. 水産技術と経営, 40-54.

柴田 理(1994)地先資源漁場形成要因研究事業 (マダラの生態と資源に関する研究). 平成5年度 秋田県水産振興センター事業報告書, 103-111.

水産庁(1989)我が国漁獲対象魚種の資源特性(Ⅱ). 水産庁研究部, 1-96.

手塚信弘・荒井大介・小磯雅彦・友田 努・島 康洋(2007)七尾湾におけるマダラ天然稚魚の移動と成長. 栽培漁業センター技報, 6, 50-53.

與世田兼三・広川 潤・長倉義智・有瀧真人・小林真人(1992)石川県能登島周辺海域におけるマダラ成魚の成熟状況と卵・稚仔魚の分布. 栽培技研, 21, 21-30.

表1. 日本海におけるマダラ漁獲量（単位：トン）

年	青森	秋田	山形	新潟	富山	石川	北区計	西区*1
1964	85	555	134	210	536	1,837	3,357	1,022
1965	63	347	158	337	557	2,421	3,883	587
1966	57	277	231	438	402	1,745	3,150	403
1967	58	428	364	444	141	1,154	2,589	256
1968	37	306	300	431	127	1,057	2,258	529
1969	19	471	301	479	126	988	2,384	1,113
1970	19	332	178	341	59	746	1,675	77
1971	45	497	154	398	70	835	1,999	37
1972	37	329	130	331	181	872	1,880	18
1973	73	313	155	432	126	730	1,829	119
1974	123	453	301	588	110	711	2,286	416
1975	128	989	515	483	148	900	3,163	270
1976	299	1,161	519	671	127	1,225	4,002	216
1977	468	1,498	407	558	108	1,178	4,217	229
1978	351	895	445	425	107	1,691	3,914	138
1979	355	790	500	482	50	1,180	3,357	250
1980	421	818	330	229	66	858	2,722	276
1981	407	811	250	276	55	985	2,784	462
1982	508	528	209	280	83	1,967	3,575	359
1983	289	451	182	266	51	950	2,189	169
1984	658	457	293	287	39	874	2,608	148
1985	368	291	261	377	50	895	2,242	105
1986	245	201	148	340	72	1,101	2,107	106
1987	240	238	150	464	127	843	2,062	197
1988	484	508	507	832	110	1,192	3,633	156
1989	1,055	750	715	1,159	80	1,415	5,174	161
1990	945	762	493	883	77	1,277	4,437	116
1991	603	368	202	397	29	672	2,271	54
1992	368	214	140	240	17	376	1,355	39
1993	314	161	85	235	9	234	1,038	27
1994	331	230	98	193	19	365	1,236	25
1995	456	350	149	198	12	312	1,477	28
1996	490	448	277	320	7	203	1,745	24
1997	617	674	344	347	4	154	2,140	27
1998	685	608	265	166	5	113	1,842	29
1999	790	596	171	156	19	174	1,906	26
2000	569	436	204	198	11	263	1,681	30
2001	275	384	174	222	12	217	1,284	35
2002	199	457	157	187	13	239	1,252	66
2003	252	348	188	203	24	299	1,314	92
2004	277	412	367	339	22	542	1,959	108
2005	484	684	655	766	27	408	3,024	140
2006	352	559	644	896	14	590	3,055	233
2007	410	998	717	1,112	8	424	3,669	264
2008	352	649	509	796	9	422	2,737	336
2009	447	799	422	949	8	578	3,203	292
2010	335	900	399	820	11	1,160	3,625	427
2011*2	284	926	473	944	22	1,086	3,735	704

各府県の農林水産統計年報に基づく。

*1 福井～鳥取。

*2 暫定値。

表2. 沖合底びき網（1 そうびき）によるマダラの漁獲動向

年	漁獲量（トン）	有効漁獲努力量* ¹	有漁漁区数* ¹	資源量指数* ¹
1979	779	51,702	562	7,597
1980	835	62,132	498	6,969
1981	740	53,627	462	6,540
1982	632	62,652	473	6,463
1983	453	69,502	481	4,197
1984	503	60,965	454	4,471
1985	393	64,732	423	2,529
1986	267	52,983	430	3,625
1987	383	49,327	430	5,318
1988	684	49,267	504	8,222
1989	1,357	58,923	590	13,041
1990	966	52,641	568	10,451
1991	521	50,353	510	4,745
1992	259	39,899	431	2,628
1993	228	33,898	379	2,496
1994	257	33,550	426	2,938
1995	355	32,500	383	4,670
1996	435	34,327	398	5,729
1997	576	30,326	371	7,571
1998	518	32,603	356	4,572
1999	663	31,646	332	5,390
2000	427	29,430	346	3,498
2001	263	26,939	331	4,190
2002	247	23,819	335	3,365
2003	238	24,151	294	2,799
2004	254	20,069	315	5,533
2005	554	21,927	305	8,811
2006	381	24,677	303	6,376
2007	638	29,154	281	6,271
2008	463	23,608	290	7,068
2009	598	20,152	301	11,561
2010	532	20,117	282	10,546
2011* ²	464	22,116	287	6,330

沖合底びき網統計による（加賀沖以北を集計）。

*1 各項目については、補足資料 1 を参照。

*2 暫定値



図 1. 本州日本海側におけるマダラの主要分布域

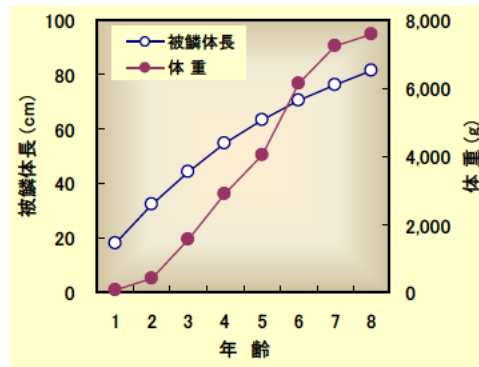


図 2. 日本海におけるマダラの成長様式

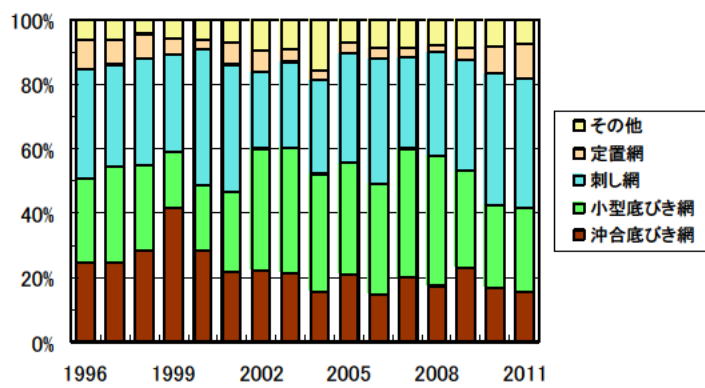


図 3. マダラ日本海系群の漁業種類別漁獲割合の経年変化

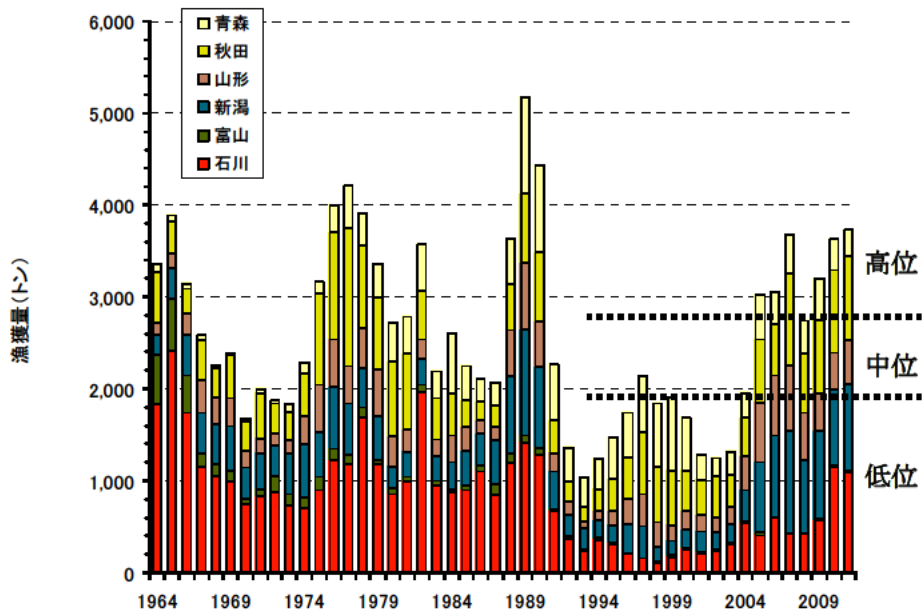


図 4. マダラ日本海系群の漁獲量の経年変化と資源水準の目安
高位と中位の境界ライン：2,800 トン。
中位と低位の境界ライン：1,900 トン。

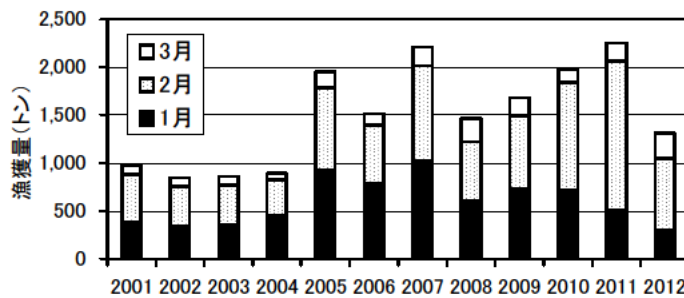


図 5. マダラ日本海系群の 1～3 月の漁獲量 (2004 年以降は速報値)

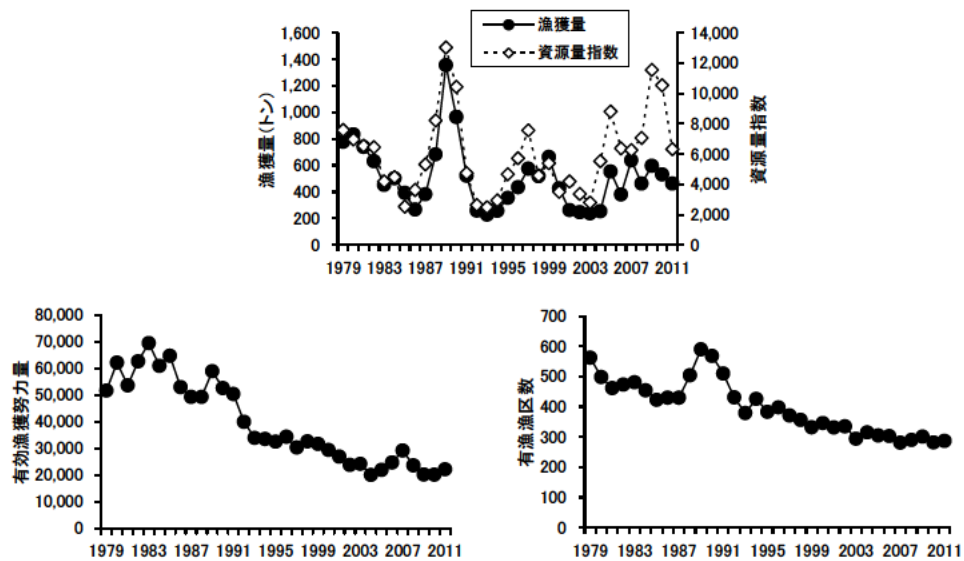


図 6. 沖合底びき網 (1 そうびき) によるマダラ日本海系群の漁獲動向

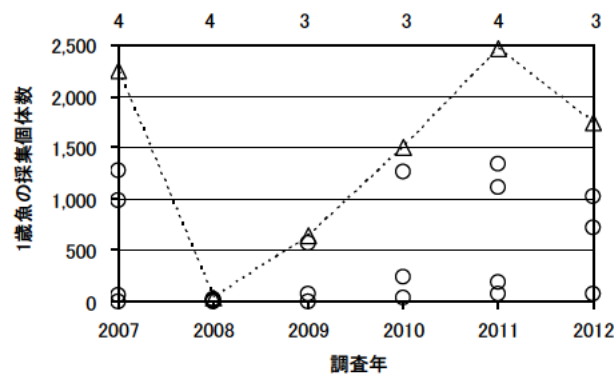


図 7. 新潟県直江津沖での小型底びき網による春季マダラ 1 歳魚の採集個体数の経年変化

グラフ上部の数字：各年の曳網回数。

○：各曳網での採集個体数。△：採集個体数の多い上位 2 曳網の合計値。

1 歳魚：体長 10～32cm 未満と仮定。

実施機関：日水研 (2007～2011 年)、新潟水海研 (2012 年)。

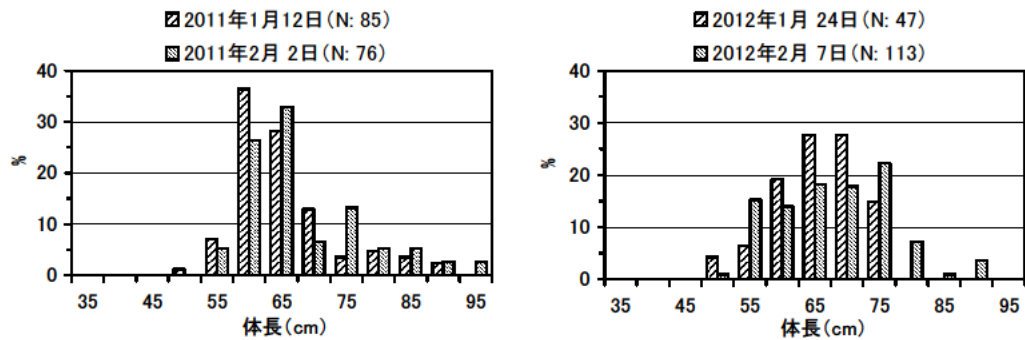


図 8. 青森県の刺し網漁船が漁獲したマダラの体長組成

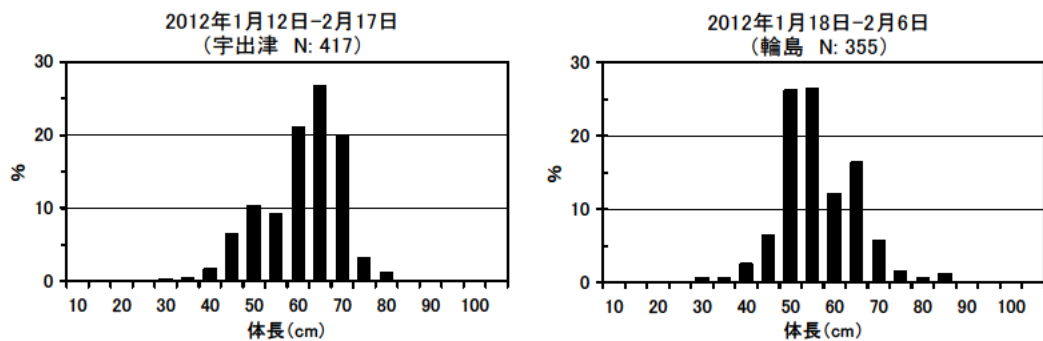


図 9. 石川県の刺し網漁船が漁獲したマダラの体長組成

「日本海中部海域マダラ栽培漁業資源回復等対策事業」のデータを一部使用。
ただし、全長データは桜井・福田(1984)に基づき体長に換算。

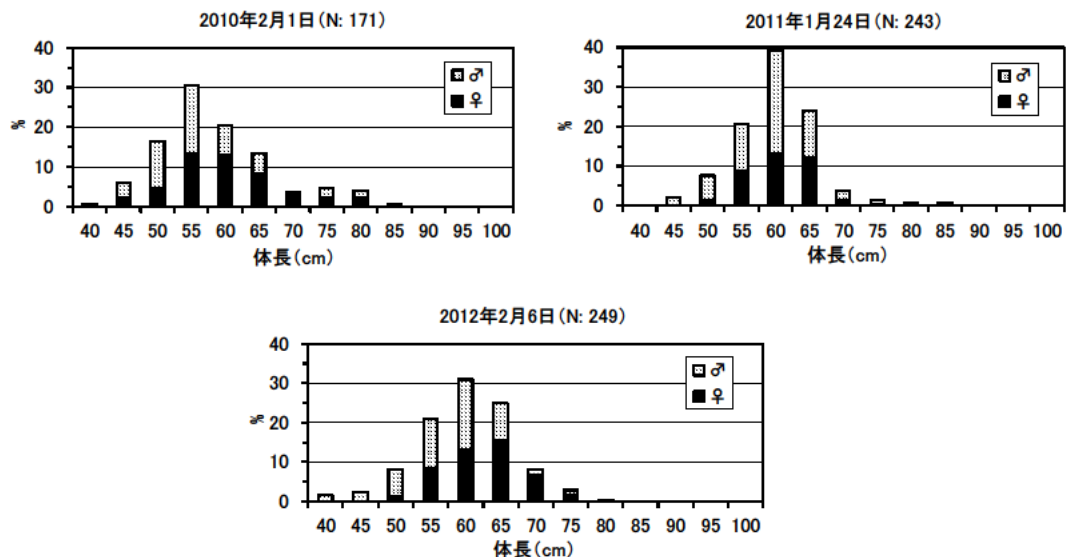


図 10. 山形県の小型底びき網漁船が漁獲したマダラの体長組成

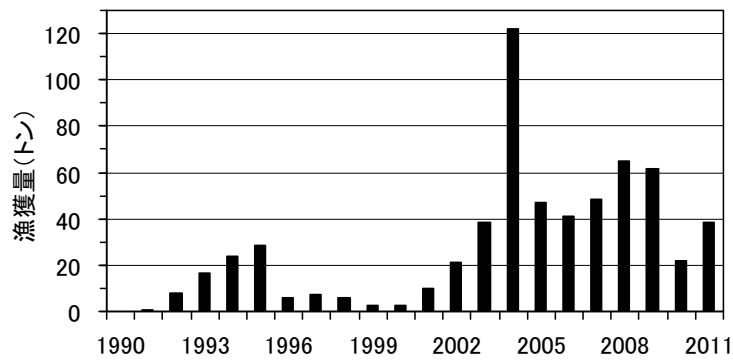


図 11. 山形県におけるマダラ幼魚（1～3 歳魚が主体）の漁獲量の経年変化
（石向(2004)に山形水試によるデータを追加）

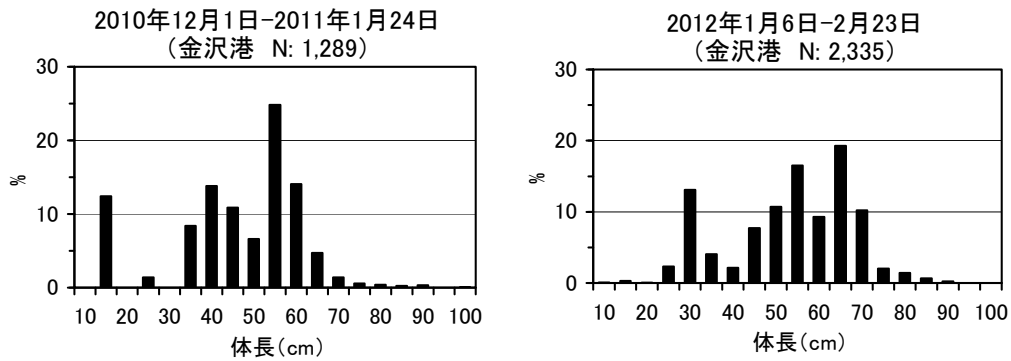


図 12. 2010～2012 年の主漁期における石川県の底びき網漁船が漁獲したマダラの体長組成
「日本海中部海域マダラ栽培漁業資源回復等対策事業」のデータを一部使用。
ただし、全長データは桜井・福田(1984)に基づき体長に換算。

補足資料 1 沖底漁獲成績報告書を用いた資源量指標値の算出方法

沖底漁獲成績報告書では、月別漁区（10 分柁目）別の漁獲量と網数が集計されている。これらより、月 i 漁区 j における CPUE(U)は次式で表される。

$$U_{i,j} = \frac{C_{i,j}}{X_{i,j}}$$

上式で C は漁獲量を、 X は努力量（網数）をそれぞれ示す。

集計単位（年または漁期）における資源量指数(P)は CPUE の合計として、次式で表される。

$$P = \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^J U_{i,j}$$

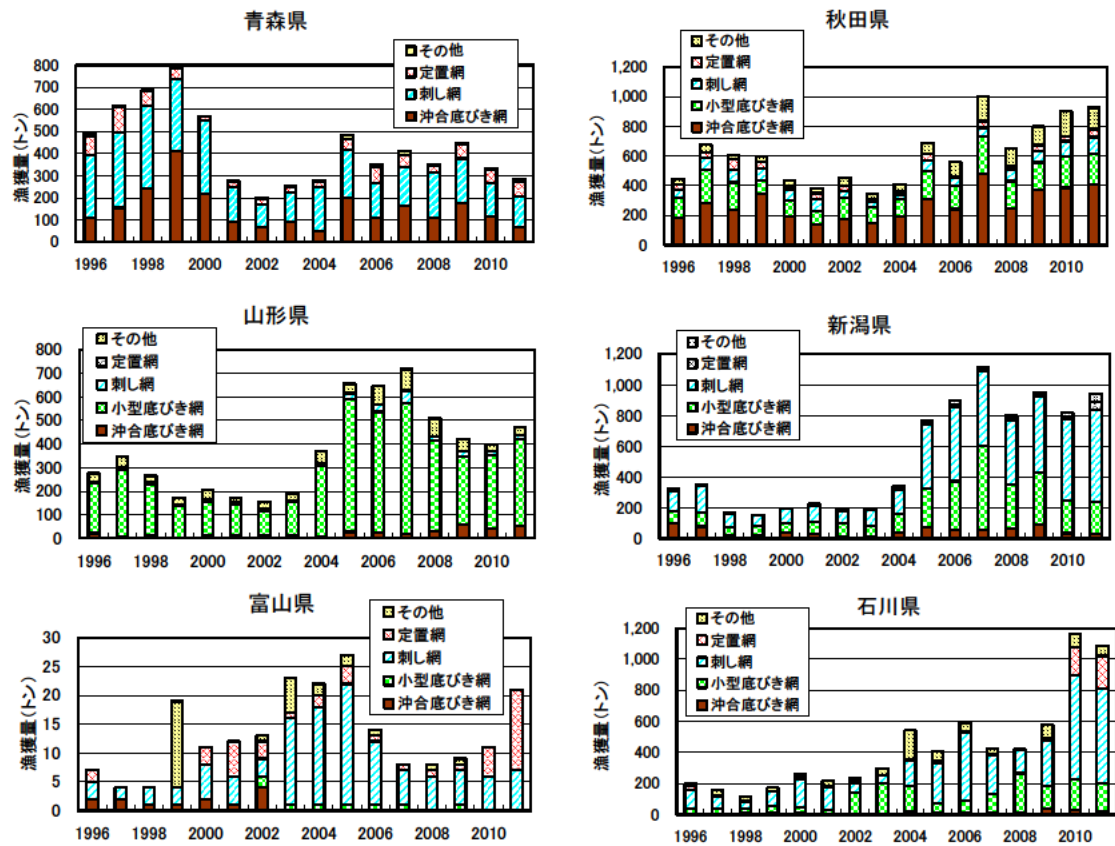
集計単位における有効漁獲努力量(X')と漁獲量(C)、資源量指数(P)の関係は次式のように表される。

$$P = \frac{CJ}{X'} \quad \text{すなわち} \quad X' = \frac{CJ}{P}$$

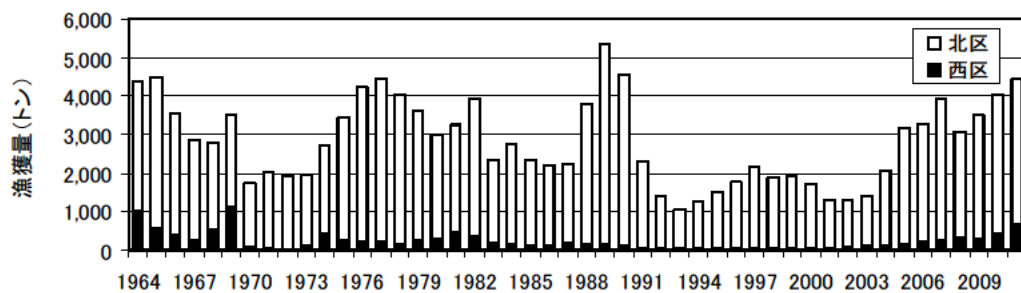
上式で J は有漁漁区数であり、資源量指数(P)を有漁漁区数(J)で除したものが資源密度指数(D)である。

$$D = \frac{P}{J} = \frac{C}{X'}$$

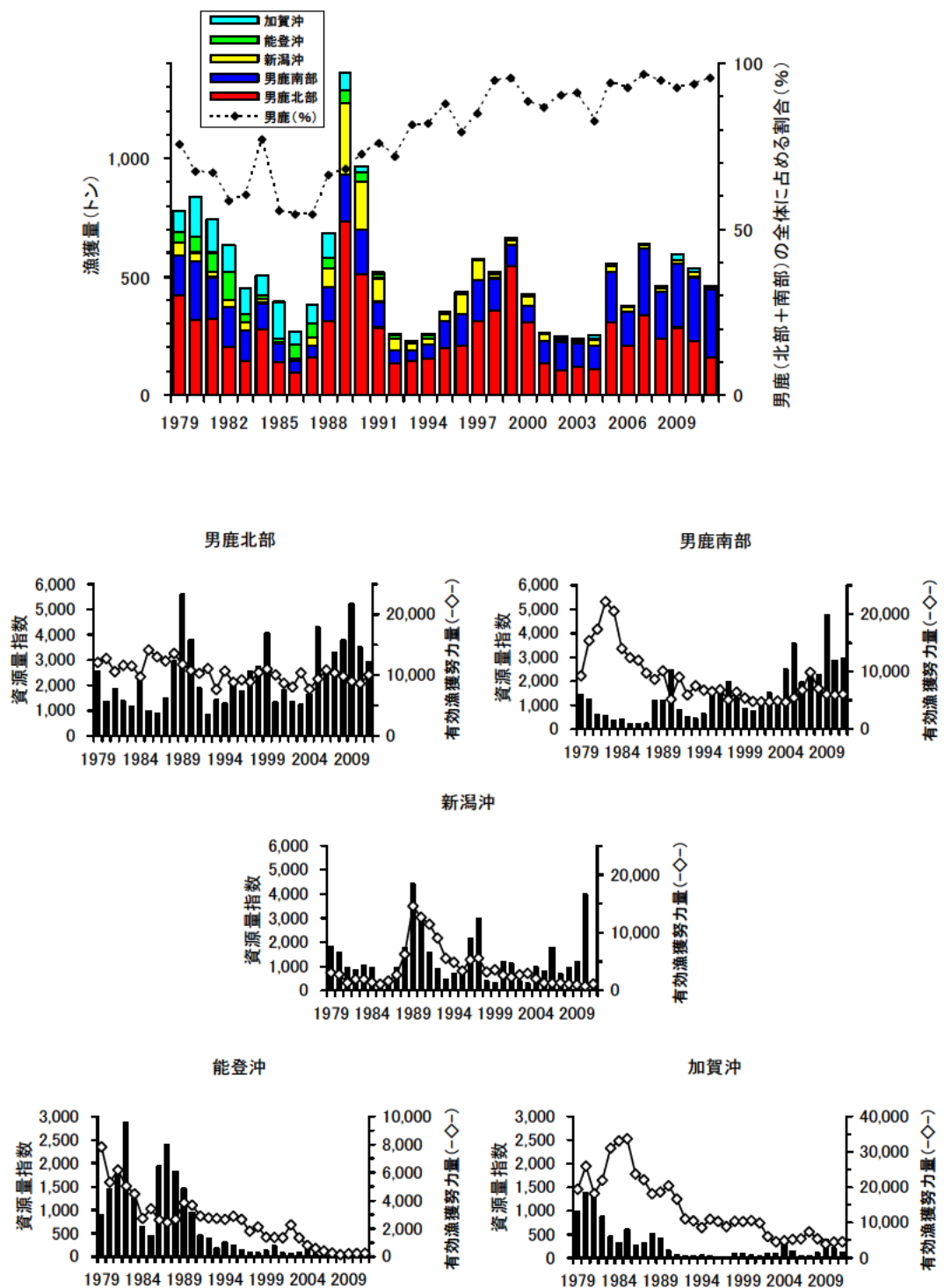
本系群では、努力量には有漁漁区または有漁網における値を合計したものをを用いている。資源が極めて少ない場合（分布域なのに対象種の漁獲のない操業がある場合）、有漁漁区数や有漁網数を用いると、CPUE が過大推定される可能性がある等の問題がある。しかし、沖底の対象種では、10 分柁目の漁区内に均一に分布していないことがほとんどであり、ある魚種に対する狙い操業下では、同漁区内に分布する他の魚種に対し全く努力が掛からないことが起こり得る。この場合、操業された漁区の全努力量を用いると、他の魚種の CPUE は過小推定になる。沖底が複数の魚種を対象にしていることから、有漁漁区数や有漁網数を用いたほうが、対象種に掛かる努力量として妥当であると考ええる。



付図 1. 各県におけるマダラの漁業種類別漁獲量の経年変化 2011 年：暫定値。



付図 2. 日本海におけるマダラ漁獲量の経年変化
北区：青森県～石川県、西区：福井県～鳥取県。



付図 3. 沖合底びき網(1そうびき)によるマダラ日本海系群の海区域別漁獲動向

能登沖と加賀沖の資源量指数のスケールが、他の海区域の1/2である点に注意。

能登沖と加賀沖の有効漁獲努力量のスケールが、他の海区域と異なっている点に注意。

海区域：日本海区域水産研究所(2011)に基づく。